

真理条件説と实在論

菅, 豊彦

<https://doi.org/10.15017/1187>

出版情報 : 文學研究. 100, pp.51-77, 2003-03-31. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン :
権利関係 :

真理条件説と实在論

菅 豊彦

はじめに

J・ロックの『人間知性論』第三巻の言語論は近世における言語の考察を方向づけた哲学的意味論の古典であるが、そこには啓蒙主義的言語観が典型的に示されている。

思想はすべて人間自身の胸の内にあつて、目に見えず、他人から隠されて(いる)、∴したがって、人間は、自分の思想を作る目に見えない観念を他人に知らせることができる、ある外的可感的記号を見出す必要があつた。⁽¹⁾

このように言語の目的は思想の伝達と記録であり、言葉の意味とは言葉を使う人の「心にある観念」であるというのがロックの基本的見解である。

この啓蒙主義的言語論の背景には、世界を対象化し、客観化していこうとする近世思想が働いている。惑星の運動になんら目的を認めることができないのと同様に、言語行動それ自身を眺めるかぎり、その物理的運動のうちに

意味内容は存在しない。したがって、言語行動が意味内容を表現しているとすれば、それは物理的・身体的な運動のうちにあるのではなく、その背後にある精神・心がその言語行動を引き起こしているからに他ならない。このように言語の意味は言語表現の表層から退き、内在的なものになる。

ロックの観念の理論によれば、一般名辞に対応する一般観念は前言語的な抽象作用によって成立する精神的存在者(mental entities)であり、言葉の意味とは抽象観念である。このようにロックに代表される啓蒙主義者たちは思考と言語を切り離し、言語表現を前言語的な観念を表現するものだと考える。

ところで、J・B・ヘルダーはこの啓蒙主義的言語観に根本的な疑問を投げかけることによって、西欧の言語論の大きな分岐点を形成した。⁽²⁾ ヘルダーによれば、われわれが思考内容、意味内容と呼ぶものはそのような前言語的な所与ではなく、言語をマスターすることによってはじめて獲得されるものであり、思考と言語を切り離すことはできない。このヘルダーの見解を「表出説(expressive theory)」と呼ぶとすれば、表出説は大陸のロマン主義の伝統のなかで生きてきたと言える。

しかし、われわれの眼を英米の哲学に転ずるならば、啓蒙主義的言語観に対する徹底した批判は分析哲学の「創始者」と見なされるフレーゲによって展開されている。フレーゲは『算術の基礎』の「緒論」において主観的な観念・表象と客観的な言葉の意味とをはっきり区別すべきことを主張し、イギリス経験論の言語理論が心理主義に陥ってしまった大きな原因は、言葉(語)を文から切り離してその意味を求めたからであると指摘する。それに対して、「語は文のうちにおいて意味をもつ」という文脈原理が、フレーゲが提示する意味考察の原則である。⁽³⁾

またこの考えは、『算術の基本法則』第一巻、三十二節において、意味の真理条件説の最初の定式化として示めされることになる。なお、フレーゲは自己の『概念記法』で確立した人工言語を通して議論を展開しており、その定式化は複雑であるが、ここでごく簡略化してそのポイントを述べれば次のように表現できよう。⁽⁴⁾

文の意義(Sinn)はその真理条件を与えることによって規定され、文の構成要素の意義はそれが登場する文の意味(真理値)へどう貢献するかによって規定される。⁽⁵⁾

今日、D・デイヴィドソンの名前と結びつけられる、自然言語の意味論としての真理条件説はこのフレーゲの洞察に遡るのであり、この真理条件説をロックの啓蒙主義的言語観に代わるもつとも有望な意味理論であると捉えることができよう。

M・ダメットはその事情を次のように把握している。もしロックの言語論のような心理主義が正しいとしたら、言葉の意味は話し手の発話行為の背後に存在して、われわれ聞き手はそれを推測したり、想定するようなものになり、日常会話は推測のゲームということになってしまう。しかし、そのような把握は明らかに誤っている。言語の知は複雑な公共的社会的実践における言葉の使用能力のうちに示されるのであって、話し手の語る意味はその発話においてあらわに示されている、と。⁽⁶⁾

しかし、問題は「言葉の意味はその発話においてあらわに示される」という事態をどう把握し、どう説明するかということにあり、これがわれわれの考察課題である。

ところで、フレーゲの数理哲学、言語哲学を世に知らしめたのはダメットであるが、しかし、ダメット自身は数理哲学においてフレーゲの論理主義を取らず、直感主義、反實在論の立場を主張する。彼はまた言語哲学においてもフレーゲの實在論を批判し、反實在論を展開する哲学者である。このダメットの力強い議論の展開によって、二十世紀後半の分析哲学においては、へ實在論—反實在論問題が言語哲学、数理哲学、そして道徳哲学において重要な争点となり、各領域の議論を深めていったと言える。⁽⁷⁾

ごく図式的に言えば、フレーゲやデイヴィドソンの意味理論は「真理条件説[Truth-Condition Theory]と呼ばれ

ているように、言語の意味の解明に当たって「真理」概念を中心に据える立場であり、それに対して、ダメットの反実在論は、意味は「用法」ないし「主張条件 Assertibility-Condition」を通して規定されるという立場を取ると言えよう。

以下において、まず、真理条件説（真理条件的意味論）の概略を紹介し、それに対するダメットの批判ならびに真理条件説からの反論を通して両者の言語観を検討したい。そして、最後に、前途瞥見というかたちで、真理条件説とダメットの言語観がそれぞれ反映している実在論と反実在論の特性を取り上げてみたい。

I 真理条件的意味論

人間の活動のうちで言語活動ほど複雑なものには他に類をみない。われわれは母語をマスターするならば、了解している有限な語彙と文法から、いまだ聞いたことのない無数の文を理解できるし、また自分でそのような文章を語ることができる。

今日、自然言語の体系的考察は「形式意味論 formal semantics」の分野で進められているが、形式意味論の代表的なテキストでは、N・チョムスキーの統語論とデイヴィッドソンの真理条件説を通してその具体的な遂行がこころみられている⁽⁸⁾。

さて、「sはpを意味する」とか「sの意味はpである」という説明が理解できるためにはpの意味を知っていなければならぬ。一般に、言語の意味を説明するためにはすでに言語の意味の理解を前提していなければならぬように見える。

では、言語を学んでいない幼児に対して言葉の意味をどのように教えるのであろうか。対象を指差し、「これは机

である」とか「これは赤い」と言つて教えるのである。すなわち、ワイトゲンシュタインのいう「直示的定義」「直示的教示」である。直示的教示とは大人が幼児にある状況において言葉を使ってミセ、幼児にヤラセテミセルことによつて言葉を教え込む訓練であり、犬や猫を躡ける訓練に比較できる。

周知のように、ワイトゲンシュタインは『哲学探究』の第一節をアウグスチヌスの『告白』の引用をもつて開始するが、その狙いは、言葉の直示的教示がアウグスチヌスが捉えているよりはるかに複雑な構造をとることをさまざまな視点から示すことにあると言える。しかし、同時に、この引用をワイトゲンシュタインが自己の著書の巻頭に掲げたのは、単に批判の対象としてではなく、アウグスチヌスが言語についての重要な真理を示していたからに他ならない。

かれら（年長者たち）がそのものをわたしに示そうとすることは、いわば万民共通の自然の言語によつてあらかじめであった。そしてこの言語は、顔つき、目つき、その他四肢の動き、音のひびきからできていて、ものを求め、手にいれ、斥け避けようとする心の動きを示すものである。このように、いろいろな言葉がさまざまな文句のうちにしかるべきところで用いられるのをしばしば聞いて、わたしはそれらの言葉がどのようなもの（9）の符号であるかを推知するようになった。

この引用に言及されている「万民共通の自然の言語」は人間が「人為の言語」を習得するための不可欠な条件であり、それゆえに、自然言語の教授と学習のプロセスはどの場合でもほぼ同じ過程をとると考えることができる。

ところで、デイヴィドソンの場合、幼児の直示的教示ではなく、未だ調査されたことのない地域の原住民の言語を考察するフィールド言語学者の解釈作業をモデルとして考えており、それを「根源的解釈radical translation」と

呼んでいる。しかし、ごく大ざっぱに捉えるならば、直示的教示を通しての幼児の母語の学習とフィールド言語学者の解釈作業は同様なプロセスであると言うことができるように思われる。⁽¹⁰⁾

真理条件的意味論の骨格を形成する2つの論点を簡単に紹介しておこう。

(一) 真理条件による意味の規定 (modest theory)

次の①は日本語の日本語による説明であり、②は、フィールド言語学者の解釈作業と同様、外国語を母語へと翻訳する場合である。

- ① 「雪が白い」(s) は雪が白い (s) としそのときにかぎり真である (T)
- ② 「snow is white」(s) は雪が白い (s) としそのときにかぎり真である (T)

さて、この②は単なる翻訳のマニュアルであり、①は単なる同語反復にすぎないようにみえる。しかし、そうではない。この図式T(以下、T文と呼ぶ)において、まず、へ文について述べることにし、へ文を使って世界について語ることにし、をはつきり区別しておかなければならない。

上に挙げたT文①と②を次のような双条件法に書き換えることができる。

- ③ 「雪が白い」(s) は真である ⇔ 雪が白い (s) (T)
- ④ 「snow is white」(s) は真である ⇔ 雪が白い (s) (T)

③と④のT文は、等号の上部の対象言語sの意味を与えているが、等号の下部のメタ言語(s')はその文を使って世界に言及している文であり、単なる同語反復や翻訳のマニュアルではない。

しかし、それは同時に次のことを意味する。すなわち、③と④のT文の下部はすでに意味を備えて世界に言及する文であり、③と④のT文を理解できるためにはすでに下部の言語の意味を理解していなければならないということである。

④をフィールド言語学者の調査報告とするならば、この下部は言語学者の母語であり、③を幼児に言葉を教える場合と想定するならば、下部は幼児がそこへと導入される母語が述べられている。もちろん、幼児を母語に導入することは概念をもたない幼児に概念をもつように教示し、訓練することである。

しかし、何を教えるかと言えば、その言葉の意味を教えるのであり、意味理論としてそれを提示する場合、その言語の意味を、つまり概念を前提せざるをえない。したがって、意味理論としての真理条件説とは、ダメットによれば、「概念をいまだもっていないひとに言葉の意味を説明することを意味理論に要求するのは過大な要求だ」と考える見解である。このように概念をあらかじめ前提する真理条件説をダメットは「modest theory (控えめな理論)」と呼ぶ。

それに対して、ダメットは意味理論に求めなければならないのは言語を前提した上で意味を規定する方法ではなく、言語を前提しないで、言語の「外からas from outside」言葉の意味を説明する理論であると主張する。彼はこの自己の理論を「full-blooded theory (徹底した理論)」と名づけている。

このmodest theory (控えめな理論)とfull-blooded theory (徹底した理論)の詳しい検討は次節で行うことにし、真理条件説のもうひとつの特徴を紹介しておこう。

(二) フレーゲの文脈原理とデイヴィドソンの全体主義的意味理論

さて、上の①、③の双条件法が成立するならば、次の⑤が成立する。

⑤ 「雪が白い」(s) は雪が白く (s') を意味する

すなわち、⑤に示されるような「意味する」という概念は①の真理条件によって定義することができるといふのが真理条件説の眼目である。

ところがここで困った事態が生じてくる。というのは、次の⑥のような双条件法は成立するが、しかし、われわれは⑦を主張することはできないからである。

⑥ 「雪が白い」(s) は雪が白く (s') かつ $2+2$ が 4 (s'') のときそのときにかぎり真である (T)

⑦ 「雪が白い」(s) は雪が白く (s') かつ $2+2$ が 4 (s'') を意味する

この事態をどう解決すべきであろうか。

この困難が生じてくるのは①や②のT文をそれぞれ単独で考えたからである。しかし、真理条件説は、個々の文は個々のT文を通して単独にその意味が与えられると言っているわけではない。意味理論全体を通して個々の文が規定されることを目指しているのであり、対象言語の文をT文によって理解するためには当の文が他の文や他の表現の意味規定とどのように関係するか、その相互関係を知る必要がある。

たとえば、上の①の対象言語「雪は白い」は次の⑧のような主語としての物質名詞の意味規定と⑨のような述語

の意味規定に分析される。さらに別の例を挙げれば、固有名や述語は⑩や⑪のようにその意味が規定される。そしてフレーゲの文脈原理が示唆する重要な論点は、たとえば、⑧⑨⑩⑪で規定された各表現が別の文脈において登場する場合、同じ機能（貢献）を果たすという点である。先に引用した『算術の基本法則』の「文の構成要素の意味はそれが登場する文の意味へどう貢献するかによって規定される」という文脈原理はそのことを表していると解釈することができる。

⑧ 「雪」は雪を指示する

⑨ あるものは、それが白いときそのときにかぎり述語「白い」を充足する

⑩ 「ヘスペルス（宵の明星）」はヘスペルス（宵の明星）を指示する

⑪ あるものは、それが四角いときそのときにかぎり述語「四角い」を充足する

ひとつの文を理解できるということは、同じ言語に含まれている他の多くの表現や文を理解しているということである。デイヴィッドソンの真理条件説は全体主義的特性をもっており、その点を認めるならば、⑦のような場合を排除することができる。

II 控えめな理論と徹底した理論

(一) 控えめな理論 (modest theory) の特徴

ダメットと真理条件説は共に、「言葉は前言語的観念の記号（コード）である」という心理主義の（意味の実体化）

を批判し、「言葉の意味はその発話においてあらわに示される」ということを出発点にする。しかし、問題は「言葉の意味があらわに示される」ということをどのように把握するかにある。真理条件説論者とダメットとのあいだ、つまり、modest theory (控えめな理論) と full-blooded theory (徹底した理論) のあいだには、発話行為において「示されるもの」をどう把握するかに関して大きな相違があり、そこに両者の言語観の違いが現れてくる。

ここで、modest theory (控えめな理論) の特徴をより詳しく考察してみよう。

まず、確認しておきたいのは次の事実である。言葉を知らない幼児は、ウイトゲンシュタインのいう「直示的教示」等を通して、母語を理解する状態へと移っていく。概念をもたない状態からそれを所有する状態へと移っていく。この言語習得のプロセスは modest theory にとっても full-blooded theory にとっても同じである。両者の相違は習得される言葉の意味をどう規定するかということにある。

さて、仮にフレーゲにならい、固有名、述語、文に関して指示 (Bedeutung) と意味 (Sinn) を分けるならば、ウイトゲンシュタインの「語ること (saying)」と「示すこと (showing)」の区別を使って以上の論点を次のように述べることができる。すなわち、

へわれわれは表現 (固有名、述語、文) の指示対象 (Bedeutung) が何であるかを語り、それによってその意義 (意味) (Sinn) が何であるかを示す。

真理条件説は、①や⑧、⑨、⑩、⑪のT文ないしそれに準じる文において、その指示対象 (対象、概念、真理値) が何であるかを語ることに於いてその意味 (意義) は示されると考える。もう一度、①、⑩、⑪を取り上げて見よう。

① 「雪が白い」(s) は雪が白い (s) ときそのときにかぎり真である (T)

⑩「ヘスペルス（宵の明星）」はヘスペルス（宵の明星）を指示する

⑪あるものは、それが四角いときそのときにかぎり述語「四角い」を充足する

真理条件説、つまり *modest theory* にとって、①のT文は対象言語「雪は白い」の完全な意味規定であり、⑩と⑪は固有名「ヘスペルス」と述語「四角い」の完全な意味規定である。その意味で、厳格な (*austere*) 意味規定と呼ぶことができよう。

しかしながら、ダメットのような *full-blooded theory* から見れば、①や⑪のような規定はまったく内容のないトリビアルな規定であり、意味理論の条件を充たすものではない。

(イ) ⑩の固有名の公理は、ある対象が「ヘスペルス」の指示対象であるかどうかを判定する規準を何ら述べていないし、

(ロ) ⑪の述語の公理は、対象がどのような場合に述語「四角い」を充足するかの規準をまったく示していない。

このようにダメットは主張するであろう。しかしでは、*full-blooded theory* は、⑩や⑪に代わって、どのような意味規定を提示するのかわれわれは反問することができる。

(ハ) 「ヘスペルス」や「四角い」を了解するとき生じる大脳生理学的事態や心理学的事態がかりに取り出せたとしても、それは意味理論における意味の規定にはなりえないであろう。

(ニ) また、ヘスペルスを話し手がどのように捉えているかという「対象の捉え方」は、話し手がどのような状況

にいるかに依存して変化するものであり、言葉の意味規定の条件を充たすとは考えにくいのではないかと思われる。

ダメットは *modest theory* を批判し、「白」や「四角い」といった表現の意味を前提しないで、その言葉の意味を説明しようというのである。しかし、それは一体どのような方法で実現されるのであろうか。

(二) 徹底した理論 (*full-blooded theory*) とその問題点

ダメットにとって、意味の知識は暗黙的な知識 (*implicit knowledge*) であって、それは命題を通して与えられるのではなく、現実の言語使用において示されるものである。では、言語を前提しないで言語の「外から」、この暗黙的な知識を記述することができるだろうか。たとえば、「四角い」という表現の意味(用法)をその表現の外から記述することで、言葉を学んでいない幼児はその記述に示された実践をマスターすることによって表現の意味を習得するのだとダメットは考えているように思われる。⁽¹¹⁾ 彼はそれを次のように説明している。

「四角」という概念を把握しているということ(は)少なくとも四角いものと四角でないものとを区別できるということである。そのような能力は、四角いものをそうでないものとを異なる仕方で扱おうとするような人物のみ帰属しうる。そして両者を区別できるということのひとつの可能な規準は「四角い」という語を四角いものに適用し、それ以外のものには適用しないということである。⁽¹²⁾

この説明において「四角い」という表現は頻繁に使われている。しかし、その使用の仕方は *modest theory* におい

て、「あるものはそれが四角いときそのときにかぎり、〈四角い〉を適用できる」といったかたちで概念の意味内容を前提する仕方で規定されてはいないとダメットは考えている。

「四角いものと四角でないものを区別できる実践能力」の説明とは、概念を前提しないで、言葉の意味を、言語を理解している者にも理解していない者にも共通に「知覚される」事実にまで還元し、そこから「意味」の成立を説明しようとするものであると言えよう。

このダメットの full-blooded theory の特徴は「真理条件」の概念についてのダメットの把握においても示されている。多少細かな議論になるが、modest theory としての真理条件説とそれに対するダメットの見解の特徴が伺えるので紹介しておこう。

一般に自然言語を真理条件を通して解明しようとする場合、真偽が問題になる平叙文 (assertion) だけではなく、命令文、疑問文、約束を表す文等々の機能も解明しなければならない。このような文の発話行為を解明する部門を「力の理論 (theory of force)」と呼ぶとすれば、平叙文を扱う真理条件的意味理論はコア (core) の部門であり、それは力の理論によって補完されなければならない。すなわち、真理条件説は平叙文を基礎とする一元的意味理論を取っており、「真理」概念を平叙文に直接適用することによって主張内容 (平叙文の内容) を規定しているといえる。

しかし、それに対して、ダメットの見解では、平叙文を問題とする前に、真理条件が問題になるコアの部門が確立しているのであり、主張内容、つまり平叙文の内容はこのコアの規定から導出されるということになる。このコア部門に関するダメットの見解は、先に引用した「四角いものと四角でないものを区別できる実践能力」を説明しようとする full-blooded theory の基本的態度を反映していると言えよう。

しかし、言語前提しないで、言語の「外から as from outside」言葉の意味を、つまり、実践能力を記述しようと

するfull-blooded theory (徹底した理論) はそもそも可能なのであろうか。ダメットの説明に対しては、J. マクダウェルや飯田隆によつて的確な批判がなされてきている。⁽¹³⁾ ここでは飯田の議論の概略を紹介しておこう。

Xを、まだ四角の概念をもたない幼児だとし、四角いものと四角でないものを区別できる実践能力をXにどのようにしてもたしうるかを考えてみよう。Xは四角の概念も、それを表現する言葉もたないから、Xにとつて手が必要になるのは、すでにその概念をもっているわれわれの、四角いものに対する振る舞いしかないことになる。

しかし、Xに観察できたわれわれの振る舞いは、「四角いものに対する振る舞い」としてではなく、「四角いもの、あるいは、三角のものに対する振る舞い」として記述されるのが正しいかもしれないのである。たしかに、Xがさらに観察を続ければ、後者の記述が正しくないことが判明するかもしれない。しかし、どれだけ多くの観察を続けようと、「四角いもの、あるいは……のもの、あるいは……のもの」といった競合する事例をすべて追放することは不可能である。

このマクダウェルや飯田の議論はワイトゲンシュタインの「規則遵守の問題 rule-following consideration」のひとつの応用である。⁽¹⁴⁾ 言葉の意味を、言語のもつ規範性を、ダメットの主張するように、言語の外から説明することは不可能であるように思われる。

飯田はダメットのfull-blooded theory (徹底した理論) を「言語をはじめて学ぶときに学ばれることの全体を、われわれのように言語を身につけてしまった者の視点からだけではなく、言語をもたない者の視点からも了解可能である」と考える見解として規定し、⁽¹⁵⁾ それは不可能であると診断している。

またマクダウェルは彼が擁護しようとするmodest theory (控えめな理論) を「母語を身につけるといふことは、それ以前にあつた心の状態を行動に表せるようになることではなく、言語によつて表現できる仕方での心をもつようになることである」という見解として表現しているが、⁽¹⁶⁾ この「言語によつて表現できる仕方での心をもつよう

なること (becoming minded in ways that the language is anyway able to express)」という規定は、われわれがはじめに述べた啓蒙主義的言語観に対するヘルダーの「表出説」の立場に通じているということができよう。

他方、啓蒙主義的言語観である心理主義に対する批判から出発したダメットの見解は、言語を前提しないで言語の意味を説明しようとする立場を取るゆえにきわめて行動主義的であるとともに、それが個人の「理解」の概念と結びつけられ、逆に彼が批判する心理主義の危険に晒されていると言うことができるように思われる。

さて、ここで「言語によって表現できる仕方での心をもつようになる」表出説としての真理条件説をもう少し辿ってみよう。

「雪が白い」や「このテーブルは四角い」という表現は、その表現がまったく理解できないひとにとっては、最初、単なる音声にすぎないが、徐々にまとまりのある、構造をもつものとして把握されるようになり、用いられた文の内容にわれわれの注意は注がれるようになっていく。

またこの文の内容は単なる言葉の背後にある「隠れたもの（観念）」ではなく、言葉のうちに見たり聞いたりできるものとして捉えられる。たとえば、「このテーブルは四角い」という言葉がへこのテーブルは四角いという思想と結びつけて教えられて行くことよって（もちろん、それは「テーブル」や「四角い」の表現の教示、習得を通してであるが）、へこのテーブルは四角いという思想は「このテーブルは四角い」という言葉のうちに見、聞くことができるようになってくる。

このように言語行動の現れそのものが本質的に意味内容を含むものであり、ちょうど、悲しみや喜びを相手の表情のうちに見ることができるよう、われわれは発話行為のうちに言葉の意味内容を見ることができるのである。その意味において、*modest theory*にとって、文の真理条件はその文が表現する意味内容と同じであり、真理条件は文の用法と不可分である。

modest theoryは自然言語を前提する。われわれは日本語という「ノイラートの船」に乗っているものであり、この船をいったん下りて、日本語という自然言語と世界の関係を「超越論的視点」から考察することはできない。意味理論としてfull-blooded theoryは不可能な試みであり、ノイラートの船の中で、真理条件説という手段を使ってその内部構造を解明することがわれわれに許された唯一の道だと考えるのである。真理条件説は日本語、英語といった自然言語の構造を個々の文の真理条件を通して規定しようとするものであり、意味理論と個人の言語運用能力は一応切り離されて論じられている。それに対して、ダメットのよう個人言語運用能力を通して意味理論を構築しようとするれば、それは、個体主義的、行動主義的、検証主義的な意味理論になり、それが反実在論的な方向を取るのには自然な流れであろう。

III 真理条件説の背後にある言語観（個体主義⇔言語の社会的分業）

フレーゲは「ソクラテスは人間である」という単称文と「人間は動物である」という量化文とは根本的にその論理構造が異なることを『概念記法』において明らかにし、アリストテレス以来続いてきた古典論理学を大きく書き換えて行った。

それに対して、ラッセルは「ソクラテスはハゲである」「現在のフランス国王はハゲである」における固有名「ソクラテス」と確定記述句「現在のフランス国王」(the present king of France)は見かけとは異なり、その表現方法はまったく異なるものであることを確定記述句の分析を通して明確にした。⁽¹⁷⁾

その後、ラッセルは「ソクラテス」や「コロンプス」といった固有名も記述句の束の省略形であると考えようになり、一九三〇年代にはこの記述の理論は論理実証主義によって「哲学的分析」のモデルとして捉えられるよう

になってくる。

(イ) ここで鳥瞰的な視点から現代の言語哲学を眺めてみよう。なお、以下の記述は modest theory と full-blooded theory の特徴を捉えるためのものであり、きわめて図式的であり、また少々強引なまとめ方であると言えるかもしれない。

さて、この鳥瞰的な視点から眺めるとラッセルもダメットもともにロックと同じ陣営に立っているように見える。「超越論的独我論」あるいは「個体主義」の陣営である。たとえば、ロックの言語論に登場する言語使用者は言語や社会から超越した個体であり、遭遇するさまざまな個体から抽象作用によって一般観念を形成し、それを通して思考作用を行う主体である。そして言語は自己の思想を他人に伝達する段階においてはじめて問題になってくる。

(ロ) ラッセルの場合、「コロンブス」や「ペアノ」のような普通の固有名は「アメリカ大陸を最初に発見した欧州人」とか「ペアノ公理の発見者」といった記述を通して、そのいくつかの記述を充足する対象と結びつく。この見解は固有名の意味を「対象の捉え方」として把握する見方と言えるかもしれない。固有名の意味を知るとは個人の能力であり、その指示対象を同定するいくつかの記述を知ることによって、その固有名で対象を名指すことが可能になるのだ、と考えているように思われる。

(ハ) このラッセルの記述説、つまり「理解」の概念に根ざす「個体主義」の見解に対して、S・クリプキはこの見解が現実の固有名の機能を捉えていないことを指摘する。⁽¹⁸⁾

まず、固有名が「確定記述句を充足する、その対象を指示する」というのは誤りである。たとえば、固有名「ペアノ」は「ペアノ公理の発見者」といったいくつかの記述句を通して（それを充足する）対象と結びついているわけではない。というのも、従来「ペアノ公理」を最初に発見したのはペアノだと信じられていたが、今日それは誤

りであり、ピアノではなく、デデキントが発見したことが知られている。しかし、それによつて固有名「ピアノ」がデデキントを指示することにはならないのである。

「コロンブス」についても同様であり、「アメリカ大陸を最初に発見した欧州人」といった記述が実は誤りであるという可能性は充分考えることができる。しかし、その場合でも、固有名「コロンブス」が指示対象を代えるわけではない。

クリプキは、固有名はほぼ次のようなかたちで機能すると考えている。子供が生まれ、両親はその子供を、たとえば、「コロンブス」と命名し、この名前が隣近所で使われるようになり、それが社会的・歴史的・文脈の中で「因果連鎖」的にわれわれの許にまで届いており、そのネットワークを用いてわれわれはその人物を指示することができるのだ、と。もちろん、クリプキもその詳しい構造を示しているわけではない。しかし、この見解の方が、ラッセルの「記述の束」説よりはるかに固有名の機能を正しく捉えているとわれわれは考える。

言語（「固有名」）の働きを個人の能力として把握し、それを「理解」の概念に基づけるラッセルならびにダメツトの見解は大きな問題を抱えていると言えよう。

(二)次に一般名辞(述語)について考えてみよう。固有名の場合と同様、一般名辞についてもわれわれの立場は「理解」の概念に基づく個体主義を批判し、H・パットナムのいう「社会的分業」を重要視する見解である。⁽¹⁹⁾

ここで、「ブナ」「ニレ」「金」「虎」といった自然種の名前、あるいは「チェンバロ」「キタラ」といった楽器名、さらには「腎盂炎」「肝硬変」といった病名を考えてみよう。たとえば、私が植物園で見たニレの木が気に入る、私は「庭にニレの木を植えたい」と語つたとする。ところで、私は樹木に暗く、「ブナ」を「ニレ」から区別する適用の規準を知ってはいない。しかし、私は「庭にニレの木を植えたい」という発話を通して「ブナ」ではなくまさに「ニレの木を植えたい」という意図を表現しているのである。

したがって、パトナムは「意味は頭蓋の内には存在しない」と述べ、個体主義的見解を批判する。私は「ニレ」を「ブナ」からまったく区別できないとしても、「ニレの木を植えたい」と言うことによって、明確に正確に自己の意図を表現できるし、また現に表現している。

もちろん、それは、われわれの言語が「ニレ」を「ブナ」から区別してくれる植木屋や植物学者の存在を前提しているからである。このようにわれわれの言語使用、言語行為の背景には「言語の社会的分業」と名付けるべき機能が働いていることをパトナムは強調する。

(ホ) ダメットは、言語の本質的機能を表すのに、ロックと同様に「コミュニケーションの手段」ならびに「思想の乗り物 (vehicle of thought)」という表現を使っている。⁽²⁰⁾ もちろん、ダメットは心理主義を批判し、前言語的思想を認めない。したがって、彼は「思想の乗り物」という表現を使って、言語をわれわれ個々人の思考がそこにおいて規定されるような媒体として捉えているのである。しかし、この言語の意味理論は「理解」の概念に基づく個体主義と密接不可分な関係をもっていると言えよう。

(ハ) 「コミュニケーションの手段」や「思想の乗り物 (vehicle of thought)」という言語の規定は心理主義や個体主義に結びつきやすい。われわれは先に「ノイラートの船」の比喻を取り上げたが、この比喻によって言語を捉える方がよりの確ではないかと考える。ノイラート自身はそれを科学理論の言語に限定して使用しているが、しかし、われわれはその比喻を日本語や英語といった自然言語に拡張して用いることができる。

日本に生まれた幼児は直示的教示等の訓練、教育を通して日本語という「ノイラートの船」に、つまり、社会的、歴史的に受け継がれている公共的なネットワークへと導かれる (initiation)。この日本語という船は多くの乗組員の協同作業、分業作業によって様々な世界を分節化する手段を備えており、また先に固有名や自然種の名前に関して指摘したように、コロンブスやペアノ、あるいはブナやニレといった実在に届いている。ラッセルやダメットは言

語使用者である個体が対象をどう把握するかという視点から言葉の意味を捉えようとするが、われわれは固有名や自然種の言葉の意味をコロンプスやニレといった対象の側からはじめるのである。すなわち、自然言語は本質的に実在論的構造を示している。

この日本語という自然言語は奈良時代、平安時代、江戸時代等々を経て、その間、様々な修繕、改修作業、架設作業を行われて現在に至っているのである。

IV 実在論と反実在論

ダメットの full-blooded theory は「理解」の概念に根ざす個体主義と結びついている。他方、真理条件説は厳格な (austere) な理論であり、「理解」の概念、個体主義のいずれとも無関係である。

- ① 「雪が白い」(S) は雪が白い (s) ときそのときにかぎり真である (T)
- ⑧ 「雪」は雪を指示する
- ⑨ あるものは、それが白いときそのときにかぎり述語「白い」を充足する

先に述べたように、⑧の固有名に準じる物質名詞の公理は、ある対象が「雪」の指示対象であるかどうかを判定する規準を何ら述べていないし、⑨の述語「白い」の公理は、対象がどのような場合に述語「白い」を充足するか、その規準を示してはいない。

ダメットによれば、真理条件説の問題はまさにそこにある。意味の知識は実践的能力であり、それは具体的文脈

における「用法」として示される。それゆえ、意味理論は、たとえば、「雪が白い」という文はどのような場合に適用できるのか、すなわち、どのような観察によつてその文は真とされるのかという指定を含んでいなければならない。ところが、真理条件説はそのような規定をまったく含んでいない。したがつて、それは意味理論の資格をもちえない。これがダメットの批判である。

真理条件説は本質的に実在論的であり、ダメットは「検証条件」「主張条件」という反実在論的条件を提示することによつて真理条件説を批判しているのである。この批判を「ゆるやかな批判」と「極端で、強力な批判」に分けて検討してみよう。⁽²¹⁾

(イ)「ゆるやかな批判」の論点は、真理条件説は真理概念を強調するが、他方、証拠や検証の問題に何ら言及することはなく、したがつて、それは空虚な理論であるというものである。われわれはこの「ゆるやかな批判」に対しては比較的簡単に真理条件説を擁護できるのではないかと考える。

まず、ここで「意味理論」と実践的能力としての「意味の知識」を区別しておく必要がある。意味理論としての真理条件説は、これまでたびたび述べてきたように、証拠や検証の問題に関することはない。だが、発話者の信念のレベルにおいては当然、検証の問題が生じてくる。すなわち、ダメットのいう実践的能力としての意味の知識は、発話者がどのような状況において「雪は白い」という信念をもつかという問題であり、その際には、証拠、検証が問題となってくる。そして、それを通して意味理論は証拠に関わっているのであり、決して空虚な理論ではないとわれわれは考える。

(ロ)次に「極端で、強力な批判」に移ろう。この批判は意味の問題に対して根源的な問題提起を行つており、真理

条件説、実在論を主張する場合、避けて通れないものである。

さて、「極端で、強力な批判」の論点は次のものである。幼児が母語を学ぶ場合、たとえば、「雪」「白い」「四角い」という表現を観察可能などのような状況の下で適用するかを大人はヤツテミセ、ヤラセテミセながら幼児に教え込む。その際、幼児は、それによって、観察可能な状況に対してどのように言語表現を適用するのか、その傾向性の集合 (a set of dispositions) 以上のものを学ぶわけではない。

ところで、真理条件説では主張文の意味を真理条件によって規定するが、その真理条件の中には、全称文や遠い過去あるいは他人の心についての文のように、観察可能なものを超える条件が含まれている。つまり、観察可能な状況によってはその真理を確定できないような条件が含まれている。

このことは、真理条件説が主張文の発話者に彼らが習得していないものを与えてしまっていることを示している。したがって、真理条件説を取るならば、全称文や遠い過去あるいは他人の心についての文は無意味であるということになる。

この「極端で、強力な批判」は、意味の検証理論やクワインの「翻訳の不確定性」の議論とほぼ同じ論点である。クワインの議論は「刺激意味 (stimulus meaning)」を超えて、複数の翻訳仮説のうち、どれが正しいかを決定する方法はないという議論であったが、ここではよりラディカルに、刺激意味を超えた文に意味を与える方法はないという主張として提示されている。⁽²²⁾

ここでこの問題についての詳しい議論に入る余裕はなく、われわれの基本的論点をのみ記し、それにいくつかのコメントを付して終わることにしたい。

- (A) 実在論とはへ文の真理条件はその真理条件が成立しているか否かを語るわれわれの能力を超えうる、という

見解である。

(B) 〈意味は用法を超えることができない〉という見解は重要な洞察を示している。

ダメットは(B)を認めるならば、検証条件・主張条件によって意味を規定する立場、つまり反実在論を取らざるを得ず、(A)の实在論を取ることはできないと主張する。しかし、それに対して、真理条件説論者は(B)を重要な洞察として受け入れ、しかも(A)の实在論の立場を取ることができると考える。

(1) 言語の意味を言語の「外から」説明すべきだとするダメットのfull-blooded theoryは「超越論的視点」に立ち、言葉の意味を、言語を理解している者にも理解していない者にも共通に「知覚」される事実に戻元し、そこから「意味」の成立を説明しようとする。すなわち、そのような「共通な知覚的事実」を想定し、それを通して構成主義的に言語の意味の生成を説明しようとする。この前提に立つゆえに、ダメットは反実在論を主張することになるのである。

(2) それに対して、われわれは第二、三節において、言語の「外から」意味を説明することは不可能であり、言語を前提とし、言語の中で意味を説明するmodest theory以上のことを意味理論に要求することはできないことを主張してきた。そしてわれわれの考えでは、〈(B)を認めざるをえないがゆえに、实在論を取ることができない〉というダメットの主張は彼のfull-blooded theoryという大きな問題のある前提のもとではじめて成り立つ主張である。

心の概念から例を取ってその点を説明してみよう。full-blooded theoryのように、言語を前提しないで、「痛み」や「悲しみ」の意味を説明しようとする場合、ひとつの選択は心理主義であろう。しかし、私の体験から出発するかぎり、他人の心に関してはその真理条件を語ることはわれわれの能力を超えており、他人の心についての文に意味を与えることができなくなる。この点はダメットの指摘する通りであろう。すなわち、心理主義は实在論であり、

心理主義を取るかぎり他人の心についての文に意味を与えることができなくなる。

しかし、肝心な点は、言語を前提しないで心の概念を扱うかぎりで意味を与えることができなくなる、ということなのである。

ここで、この問題についてのウイトゲンシュタインの指摘を引用しておこう。

われわれは、自分自身の場合との類比によって、彼もまた痛みを体験しているのだと思う、だから他人を介抱する。こういう説明にたいしては、それは「本末を転倒している」と言うことができよう。そうではなく、人間の振る舞いについてのこの一章から——つまり、この言語使用から——ある側面を学べ、と言うべきである。⁽²³⁾

「われわれは情緒を見る」——これを何と対比して行っているのか——われわれは顔をしかめるのを見て、そのことから（診断を下す医者のように）喜びや悲しみや退屈を推理するのではない。彼の顔を、悲しみに沈んだものとして、喜びに輝くものとして、退屈そうなものとして、直接記述しているのだ。⁽²⁴⁾

われわれはある振る舞いに対して「彼は痛みを感じている」と語り、ある表情に対して「彼は悲しんでいる」と語ることによって子供に言葉を教える。そして子供はそれらの表現がどのように用いられるかを学ぶことによって、いとも簡単に「彼は痛みを感じている」という文の真理条件に到達する。

子供は真理条件を学ぶことを通じて表現の意味を学び、こんどは「痛い」「悲しい」という意味内容を「彼は痛みを感じている」「彼は悲しんでいる」という言葉の内に見、聞くことができるようになる。このように言語と世界の関係について考察する場合、われわれはすでに言語に巻き込まれ、言語を用いている段階から出発せざるをえない

のである。

modest theoryを取るならば、言葉を学ぶことを通して、われわれは相手の顔を、悲しみに沈んだものとして直接見ることができるようになるのであり、ここに推論の介入する余地はない。われわれは先にマクダウエルの「母語を身につけるといふことは、言語によって表現できる仕方での心をもつようになることである」という言葉を引用したが、われわれは言語を学ぶことを通してより多くのものを見、聞くようになるのである。

(3)とところで、ダメットやC・ライトは後期ワイトゲンシュタインの「用法」の概念や「規準」の概念を通して反實在論を体系的に展開しようとしている。

しかし、マクダウエル、パトナムが指摘するように、後期のワイトゲンシュタインには實在論を明確に示す議論が多く存在する。⁽²⁵⁾ 最晩年の『確実性の問題』で、ムーアが論文「外界の証明」で問題にしている「ここに手がある」「私の身体が存在する」「大地は私の誕生するはるか以前から存在していた」といった「ムーア命題」を取り上げられ、ワイトゲンシュタインはそれを「世界像Weltbildを記述する命題」として捉え、「それらは、われわれが営む言語ゲームの体系全体の基礎にあたるもの」であると主張する。そしてさらに次のように指摘している。

私の世界像は、私とその正しさを納得したから私のものになったわけではない。私が現にその正しさを確信しているという理由で、それが私の世界像であるわけでもない。これは伝統として受け継いだ背景であり、私が真と偽とを区別するのもこれに拠つてのことなのである。⁽²⁶⁾

このように、晩年のワイトゲンシュタインの著作にはダメットとは逆に實在論的意味論を示唆する多くの箇所がある。

次の一節もその重要な箇所のひとつである。

われわれが何事かを信じるようになるとき、信じるのは個々の命題ではなくて、命題の体系である。(理解の光は次第に全体へひろがる⁽²⁷⁾)。

注

- (1) J. Locke, *Essays Concerning Human Understanding*, Bk. 3.
- (2) J. B. Herder, *Abhandlung über den Ursprung der Sprache*, 木村直司訳『言語起源論』大修館書店
- (3) G. Frege, *Grundlagen der Arithmetik*, p. X, フレーゲン著作権²、勁草書房、43頁。
- (4) G. Frege, *Begriffsschrift*, 1879.
- (5) G. Frege, *Grundgesetze der Arithmetik*, Vol. 1, section 32. フレーゲン著作集³、勁草書房。
- (6) M. Dummettの議論を中として、What is a Theory of Meaning? (1), What is a Theory of Meaning? (2), in his *The Seas of Language*, Oxford, 1993, pp.1〜93をよめ。
- (7) 最近、飯田隆氏の『言語哲学大全IV—意味と真理—』(勁草書房)が刊行され、自然言語としての日本語について、その真理条件的意味論の詳しい優れた研究をわれわれは読むことができるようになり、この考察もこの著書に負うところが大きい。ただ、筆者の目的は道徳的実在論を説明することであり、そのための準備作業の一環として、真理条件説と実在論の関係を検討したいというのがここでの課題であり、以下の議論もその視点からなされることになる。
- (8) R. Larson and G. Segal, *Knowledge, of Meaning*, The MIT Press, 1995.
- (9) Augustinus, *Confessions*, 1, 8, 服部英次郎訳『告白』岩波文庫。
- (10) D. Davidson, *Radical Interpretation*, なぐひら Truth and Meaning, in his *Inquiries into Truth and Interpretation*, Oxford, 1984, pp.125〜139, pp.17〜36.
- (11) J. McDowell, In Defence of Modesty, in his *Meaning, Knowledge, and Reality*, Harvard U. Press, 1998, pp.87

- (21) M. Dummett, What do I know when I Know a Language ? in his *The Seas of Language*, oxford, 1993, p.98.
- (22) J. McDowell, op. cit., 飯田隆'回轉' 146～147頁。
- (23) J. McDowell, op. cit., 飯田隆'回轉' 146～147頁。
- (24) 飯田隆'回轉' 147頁。
- (25) J. McDowell, op. cit.
- (26) B. Russell, *On Denoting, Mind*, 1905.
- (27) S. Kripke, *Naming and Necessity*.
- (28) H. Putnam, The Meaning of 'Meaning', in his *Mind, Language, and Reality*, Cambridge U. Press.
- (29) M. Dummett, op. cit.
- (30) McDowell, *Truth-Conditions, Bivalence, and Verificationism*, in his *Meaning, Knowledge, and Reality*, Harvard U. Press, 1998, pp.1～28.
- (31) W. V. Quine, *Word and Object*, MIT Press, 1960, \$45.
- (32) L. Wittgenstein, *Zettel*, 1967, \$542, 『断片』拙訳'大修館書店。
- (33) *ibid*, \$225.
- (34) H. Putnam, *Word and Life*, Harvard U. Press, 1994, ch. 13～14.
- (35) L. Wittgenstein, *Über Gewissheit*, \$151, 1969, 『確実性の問題』大修館書店。
- (36) *ibid*, \$141.